

## 私の映画評：『耳をすませば』

スタジオジブリ、宮崎駿作品には世界中に多くのファンがいる。アニメ全体にはそれほど関心なかった私でも、「となりのトトロ」は名作だと思うし、「もののけ姫」や「千と千尋の神隠し」がそれなりの評価をされたのも理解できる。

そんなジブリ作品の中で私が何となく好きな作品に『耳をすませば』（原作：柊あおい、プロデューサー・脚本：宮崎駿、監督：近藤喜文）がある。ストーリーは、一言で言えば何と言うことはない中学生のさわやかな恋の物語である。読書好きの中学3年生の少女、月島雫が、図書館で同級生の少年、天沢聖司と知り合い、初めは反発するが、ヴァイオリン職人になるという目標を持っている聖司に刺激を受け、物語を書き始める。

では、なぜこの『耳をすませば』がこれほど印象に残るのだろうか。それはおそらく、背景がニュータウンであることと関係がある。一説によれば、京王線の聖蹟桜ヶ丘駅の周辺の高台の住宅地、すなわち多摩ニュータウンの一角が舞台であるらしい。

ニュータウンや新興住宅地と言えば聞こえはいいが、それは数十年前のニュータウンや新興住宅地であって、いまは住民がいっしょに高齢化して、すっかり“オールドタウン”になっている。東京の高島平や多摩、横浜の港北などのニュータウンには、1970年代にはあこがれの“マイホーム”であった住宅が多いが、どこもいまや値下げしないと売れないありさまである。都市郊外の住宅地で一人暮らしをするお年寄りをどうケアしたらよいかということが、大きな社会問題になっている。きれいだが似たような家ばかりが並ぶ住宅地はどこか無機的な印象がつきまとう。よく似た風景が繰り返されるため、歩いてもなかなか道を覚えられず、まるで巨大な迷宮に迷い込んだような気がする。

キンツマと呼ばれてセンセーショナルな話題となったテレビドラマ「金曜日の妻たちへ」が描いたのは、東京郊外の新興住宅地でサラリーマンの夫の帰りを待つ主婦や家庭との両立を志す「キャリア<sup>ウーマン</sup>女性」たちが浮気をする話である。そこに描かれているのは、高度経済成長のなかで進んだ産業社会化や、都市への人口集中がもたらした核家族化といった「近代社会のゆがみ」である。つまり、高度経済成長が終わった後のニュータウンには、どちらかと言えばマイナスのイメージがついて回るようになってきたのである。

そんなところに登場したのが『耳をすませば』なのだ。そこで描かれる中学生の青春は、多くの人がその年代で味わってきた郷愁がある。そして、それは一見無味乾燥なイメージのニュータウンにもよい意味で人間らしく豊かな生活があり、青春があることを教えてくれる。四角四面の無機的なイメージの団地にも豊かな人間な生活がある、などと言えばそこに住んでいる人には当たり前だとしかられるかもしれないが、作品は近代化を肯定しているというよりは、むしろ近代化しても人間の生活には変わりがないと言っているようで、そこに多くの大人の観客は不思議な安心感を覚えるのではないだろうか。

また、スタジオジブリ、宮崎駿の作品にはしばしばしなやかで勇気のある少女が主人公として登場するが、『耳をすませば』も夢に向かって進もうと決意する少女の物語である。

恋愛物語だが、ただの甘い物語ではない。現代社会の普通の少女を勇気づけようという宮崎の意図が感じられる。(原作は柊あおいだが、それを取り上げて映画にしたのはプロデューサーの宮崎である。)

さらに言えば、もしかしたらそこには東京出身の宮崎の意地や希望があるのかもしれない。高度経済成長で住環境が最も大きく変わったのはおそらく田舎ではなくて東京のような都会とその郊外だ。どんなに環境が変わっても、そこに人間や動物(猫が出てくる)が暮らす限り、そこには人間(動物)らしい暮らしがあり、若者の希望と青春もある。「となりのトトロ」や「もののけ姫」が近代化へのアンチテーゼだとすれば、「耳をすませば」は環境も時代も超えた青春賛歌だと言えるだろう。同年代の中学生や高校生にとっては、もしかしたらそんなことはどうでもよくて、ただ、すがすがしい青春の物語なのかもしれないが。

(松下達彦、2014年8月30日、書き下ろし)